

「幸福の税金」

—修正稿—

2026/09/02

しのめ ののの

〈人物表〉

小平 武雄 (56) 飲んだくれ

小平 めぐみ (50) 武雄の妻

小平 美鈴 (17) 武雄の娘

1. 安アパート・外観（昼）

古びたボロアパート。

2. 小平家・居間（昼）

手狭な和室。壁や扉に、殴ったり蹴ったりしたような凹みや穴がある。

小平武雄（56）、発泡酒の缶を片手にテレビを見ている。傍の机には何本もの空き缶。

競馬中継が映っており、馬たちが次々とゴール。

武雄 「くそがつ」

泥酔した武雄、競馬新聞を床に投げつける。

居間と繋がる台所では、小平めぐみ（50）が夕飯の準備中。

小平美鈴（17）はダイニングテーブルで勉強している。

二人、武雄の声にちらっと何うような視線を向ける。

武雄 「なに見てんだっ。バカにしやがって」

と、発泡酒の缶を台所に向かって投げつける。

底に残った酒が少し飛ぶ。

めぐみと美鈴、反射的にびくっと怯える。

めぐみ、息を整えるようにして吐き、料理を再開。

美鈴、泣き出しそうな、怒っているような表情。

突然立ち上がり、その場を離れる。

武雄、顔を真っ赤にして息を整えている。

遠くで玄関の扉が開き、美鈴が外に出て閉まる音。

3. 駅前・宝くじ売り場付近（夜）

さびれた小さめの駅。

武雄、ぶつぶつと悪態をつきながら徘徊している。ふと、こぢんまりとした宝くじ売り場が目に入る。

男性が一人、宝くじを買っている。

武雄 「けっ」

武雄、バカにした様子で去ろうとする。

と、宝くじを買った男性が、くじ券を一枚落として

いく。

武雄、思わず周囲を伺う。誰も見ていないのを確認し、こっそりとくじ券を拾う。

4. 小平家・居間（昼）

武雄、くじ券を片手にテレビを凝視している。
めぐみと美鈴は不在。

テレビ画面には、当選番号と「1等 3億円」という言葉が映し出されている。

武雄、震える手でくじ券と画面を見比べる。

武雄 「あ、ああ……。当たった……。当たったあつ」

5. 高級料亭・店内（夜）

武雄、知人男性らと数人で乾杯している。

武雄 「今日は俺の奢りだからな。ありがたく飲めよ」

知人 「珍しいな。馬でも当てたか？」

武雄 「まあ、ちょっとな。おめーら貧乏人にも施してやらんと可哀想だろ？」

と、得意げな笑顔。

6. 小平家・居間（昼）

武雄、妙に小綺麗な服装と鞆で玄関へ向かう。

上機嫌を隠しきれていない。

居間と繋がる台所で、めぐみと美鈴が眉をひそめて目配せしている。二人は着古した服装。

7. 海外カジノ・店内（夜）

武雄、海外のカジノで豪遊している。

ディーラーがテーブル上のカードをめくる度、一喜一憂している。

武雄 「うわーっ。負けたー。くそ、次こそ取り返すぞっ」

8. 高級キャバクラ・店内（夜）

武雄、何人ものキャバ嬢に囲まれて乾杯している。

テーブルには既に何本ものシャンパンが空いている。
キャバ嬢1「え、何のお仕事されてる方なんですかあ？」

武雄 「ひーみーっ」

と、泥酔しデレデレ。

キャバ嬢2「でもこんなに飲んで大丈夫なの？」

武雄 「きゅうにおかねいっぱい入ったからあ」

キャバ嬢3「じゃあ奥さんも大喜びだ」

武雄 「……え？」

キャバ嬢4「さっき言ってたじゃん。奥さんと娘さんいるって」

武雄 「……知るかよ」

キャバ嬢1「ん？」

武雄 「あいつらなんか知らねーよ。俺のこと舐めやがって、感謝のひとつもしやがらねえっ」

一瞬、沈黙。

キャバ嬢2「……かわいそう。つらかったんだね」

キャバ嬢3「元氣出して。飲も飲もー」

キャバ嬢たち、場を盛り上げようとする。

武雄、少し機嫌を取り戻し、グラスを煽る。

9.

キャバクラ・店外（夜）

泥酔した武雄、ふらふらと店の外へ出てくる。

ぼつぼつと小雨が降り始めている。

歩き出そうとした時、ポケットの中のスマホが鳴る。

おぼつかない手で取り出すと、めぐみや美鈴から大

量の着信とメッセージ。

武雄、舌打ちして、

武雄 「っせーんだよ」

と、ポケットに入れようとするもスマホは落下。

地面に叩きつけられ、画面が割れる。

武雄 「んだよ……」

と、スマホを拾うも起動しなくなっている。

武雄 「あ？ おい」

何度も画面を荒々しくタップしたり、スマホ自体を叩いたりするが反応しない。

武雄 「あークソッ」

苛立ちつつスマホをポケットに突っ込む。
遠くで小さく雷鳴。

大通りへ向かって歩き始めると、道端でいちやつく
男女が目に入る。

中年男性とキャバ嬢。

武雄、違和感を抱いて思わず立ち止まる。

男性、武雄の視線に気づいて武雄を睨む。

男性 「おい。何見てんだよ」

女性 「え、なに？」

と振り返ると、美鈴である。

小さく雷鳴。

雨が強くなってくる。

武雄 「お前っ……美鈴……？」

美鈴 「こ……こんなところで何してんの？ いくら連絡しても出
ないくせに」

と、驚きつつも責め立てる。

男性 「え、誰？」

美鈴 「父親。（武雄に）え、飲んでんの？ どこにそんなお金
——」

武雄 「その恰好……お前、そういうことか？ まだ高校生だろ
っ」

男性 「えっ……」

と、不意に怖気づいて美鈴から距離を取る。

武雄 「歳ごまかして働いてんのか？」

美鈴 「うるさいな。ほっといてよ」

武雄 「ほっとけるわけないだろ。こんなことして許されると…
…」

美鈴 「お前がほっとくからだろ。責任放棄してこんなことばっ
かしてるから……」

武雄 「だからってそんな汚い仕事しやがって——」

美鈴 「大学行きたいからお金稼いでんだよ！」

大きく雷鳴。

武雄、言葉を失う。

男性はいつの間にか遠くへ逃げている。

美鈴 「そんなことも知らないくせに説教してくんな」

武雄 「でも……」

美鈴 「そっちこそ、何こんなところで無駄遣いしてんの？ こないだもなんか綺麗な服着てどっか行ってたし」

武雄 「それは……」

美鈴 「借金は？ 私がどんな気持ちで働いてると……」

武雄 「……あ、当たったんだよ」

美鈴 「は？」

武雄 「宝くじ……3億円」

美鈴、固まる。

美鈴 「……嘘でしょ」

武雄 「嘘じゃない……証明書もある」

美鈴 「お母さんには……？」

武雄 「……言ってない」

美鈴、驚愕して武雄の全身をまじまじと見る。
高そうな服装に鞆。

美鈴 「信じられない……」

武雄 「おい」

美鈴 「最低！」

と、駆け出す。

武雄 「おい待てっ」

と追いかけて、十字路に走り込んだ瞬間、横から走ってきた車に軽くぶつかる。

武雄 「った！」

と叫んで、地面に転がる。

美鈴、武雄の叫び声に思わず振り返る。

車はそのまま走り去る。

武雄 「いや、おい……いった……クソッ……」

片足を痛そうに押さえつつも、目立った怪我はない様子。

武雄がよろよろと立ち上がりかけた時、辺りが一瞬真っ白に光る。

武雄が思わず固まった瞬間、武雄のすぐ傍に雷が落

ちる。

尻もちをついた武雄、茫然と凍りつく。

雷が落ちた場所に、小さな穴があいている。

美鈴、驚いて固まっている。

美鈴 「……当たった？」

武雄 「当たってない……いや、当たった……？ 当たったけど、当たってない……」

武雄、めそめそと泣き始める。

美鈴、かなり迷った表情をしてから、武雄に駆け寄る。

美鈴 「もう何やってんの。このクソ親父、ゴミ、バカ、しねっ」とべそをかきながら、武雄を起こそうとする。

武雄 「ごめん……ごめん……」

武雄、体を支えられながら泣き続ける。

大粒の雨が二人に降り注ぐ。

10.

大学・正門（朝）

大学の入学式当日。

めぐみと美鈴、真新しい小綺麗な正装姿。

大学名が掲げられた正門前で写真を撮っている。満面の笑顔。

武雄、少し離れた場所からそれを眺めている。質素な服装。

めぐみと美鈴、写真を撮り終わると学内へ歩き始める。

武雄、踵を返してとぼとぼと歩きます。入学式の参加者で混み合う中、小さな背中が人ごみに消える。

おわり